法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-10

沖縄における戦後の文学活動

岡本，恵徳

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
2
(開始ページ / Start Page)
191
(終了ページ / End Page)
230
(発行年 / Year)
1975-10-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00013113

沖縄における戦後の文学活動

岡本恵徳

一、はじめに

本稿は、太平洋戦争で灰燼に帰した沖縄の文学活動の、昭和二十年から昭和四十七年に至る過程を展望しようと試みたものである。

周知のように、沖縄は太平洋戦争の末期、昭和十九年から二十年にかけて戦場となり、戦火のなかに多くのものを失った。そしてその後米国の軍事的な支配のもとにおかれ、日本「本土」と切り離されて、独自の歴史過程をたどるようになった。その独自な歴史過程は、沖縄が米国の極東における戦略体制を支える位置、いわゆる太平洋の「要石（キーストーン）」としての位置を占めていたから、米国の極東政策によって大きく左右されるものであった。そして、言うまでもなく、極東政策の具体化としての米国の沖縄統治策と、それら

の政策に対する沖縄住民の対応のありかたを軸として、沖縄の戦後の歴史過程は展開したのである。

このことは、沖縄の住民意識のありようを考えるうえで、とりわけ注目に値する。のちに「異民族支配」からの脱却というスローガンを主軸に、「祖国復帰運動」が展開されたが、このような米国の軍事優先の直接統治は、住民と直接的にそれが向きあうかたちをとることとなり、住民の意識がきわめて政治的な色彩を帯びざるをえないという様相を呈する一つの原因をつくりあげたのである。

沖縄の地域の狭さが、そのことに拍車をかける。沖縄が幾つもの狭い島々から成りたっていることは、米国の直接的な統治を容易にしたであろうことは否めないが、このような地域性の狭さは、その地域に住む住民にとって何をするにも、あるいは個人の些細な日常的行為でさえも、米国の統治する政治的な政策と何らかの形でかかわりを持ってくるという一面を持つ。わけても、広大な基地と、そこに駐留する米国軍人や軍属の存在に経済的に依存せざるをえない地域において、それははなはだしかったといえよう。

沖縄の経済が基地経済というかたちで米国に依存しており、その経済のありかたが、米国の極東政策によって規定されており、また沖縄以外の地域との交渉も米国の統治政策にもとづいて行なわれる以上、沖縄に住む人々のありようは、米国の直接的な統治政策という政治的な状況からぬけ出すことは不可能であった。そして、そのような状況のもとでは、沖縄の文学活動も、きわめて大きく政治的な状況によって規定されるのである。

文学が、それを創りだした地域の政治的・社会的状況と大きなかかわりをもつことは、沖縄に限らず多くの場で見られることであろう。昨今の文学界で「内向の世代」という呼称でとらえられている一つの傾

向があり、その呼称がそれなりに定着している文学的な状況も、昭和四十年代の日本の政治的・社会的な状況とのかかわりをぬきにしては考えられないといわれるのも、このことをさしているであろう。しかし、沖縄の場合は、先に述べたような沖縄の戦後の独自な歴史的展開によって、政治と文学のかかわりをより強くきわだたせているといえよう。

後に述べるように、ある時期には沖縄においても、ひたすら個の内部に沈潜し、そこに表現の場を求めようとする動きも存在した。しかしこのような動向も、対象的世界（外部の日常的現実）の政治状況があまりに尖鋭的であり、それが個の内面を黙殺したり踏みにじっていくことに対する反措定として出てきたのであって、曖昧で不確かな対象的世界に対して、確かな手ごたえのあるものとしての内的な世界を提示するという意味合いのものは、それ程強くはない。むろん個の内部に表現の場を求める以上、そこに確かなもの手ごたえのあるものを求めようとする意志が多少にかかわらず存在することは否定できないが、それ以上に、政治的な状況で、一般に言って落ちこぼれていきがちな個の内的なものを恢復するというモチーフが濃いのである。そして、それも、くり返し述べてきたような、沖縄の戦後の歴史過程に起因するものであるといえよう。

沖縄の戦後の文学活動の特質を示す一つの象徴として政治的な状況とのかかわりをあげたが、更に他の一つをとりあげて言うならば、沖縄の戦後の文学は、自らの生きている地域の独自な性格を深め、それを表現しようとする試みをみせてきたことをあげることができよう。これはとりわけ、明治から昭和の十年代にかけての沖縄の文学活動が、沖縄の独自なものを自己否定することによって、中央の文壇文学に近似

するところで表現を行なってきた過程とは異る。

明治から昭和十年代にかけての沖縄の文学活動の、以上のような特質については、雑誌「文学」一九七二年四月号（第四十巻第四号）においてふれたのでここにはくり返さないが、はるかにおくれて近代の過程にくみこまれた沖縄は、近代化への焦慮から、性急に自らの持つ特質を自己否定することを通して近代化を推進しようと試みたのであり、そのことが、明治以後の沖縄の文学活動を特徴づけているのである。

これに対し、米国の軍事優先の政策にもとづく直接的な統治下にあった戦後では、次第に沖縄というみずからのもつ特質を対象化しようとする試みが強くなっている。これは、誰の手をかりることなく沖縄の人々がみずからの手で一つ一つさまざまの問題を処理せざるをえなかったという社会の状況に由来するであろうけれども、このことが、明治以後の沖縄の歴史をあらたに対象化し、その弱さを克服しようとする意欲と結びついて前述のような特質をつくりだしたといえよう。

それはともあれ、沖縄の戦後の文学活動は、大きくいって、前述のような、政治的状況とのかかわりと、そのなかでの沖縄独自のものの対象化の試みという二点にその特質を見出すことができるのであって、本稿ではこのような特質を示すに至った戦後の文学の具体的な歩みを展望しようと試みたものである。

くりかえし述べたように、沖縄の戦後の文学活動は、沖縄の政治的な状況に大きく規制されているのであるから、文学活動の環境としての沖縄の戦後の歴史過程を概観し、その後に、文学活動の具体的な展望を試みたい。

二、文学的環境

沖縄の戦後の歴史過程については、これまで多くの人によってさまざまな見解が示されてきた。その多くは政治運動を中心に、戦後の歴史をとらえようとするもので、経済史的な側面やその他の面からの掘り下げは充分ではない。また、歴史過程があまりに身近かにあり、なまなましすぎて充分に客観化しえないという面や、住民の政治的な動向に対する米国側の対応が資料として明らかにされていないこともあって、戦後史をトータルに把握することをきわめて困難にしているということもあろう。施政権返還後の今日になって、新崎盛暉沖縄大学助教授を始め多くの研究者が、戦後史の検討を深めているが、その成果は今後にまたなければならない。したがってここでは、文学の環境としての歴史過程に重点を置いて簡単に概括するに留めたいと考える。

一九四五（昭和二十）年六月、日本の敗戦より先に事実上米国の占領下におかれた時から、沖縄の戦後は始まる。戦場と化して一切のものを失ない、誇張した言いかたではなしに全くの廃墟と化した沖縄では、人々は捕虜として収容所に集結させられるところから生活を始めた。ないといえば一切がなく、衣服も食糧も米軍の与えるものによってまかなっていたのである。有棘鉄線の張りめぐらされたテントの中で、他の地域に住む人々との交流もなく、米軍の監視と命令の下で戦場の跡かたづけや食糧生産の作業にかりだされるという状況であったから、そこには文化活動らしいものは存在しなかったといってよい。収容所の

中で、わずかに、缶詰の空缶とパラシュートの糸を利用した三味線がひそかにつくられ、心を慰めるものとなったという。[1] 同年秋、収容所が解散、住民は戦前住んでいた村に帰ることができたが、生活は米軍の無償配給によって支えられていて、収容所生活の延長された状態であった。

翌一九四六（昭和二十一）年から四七年にかけて、ようやく自由な交通が可能になり住民間の交流が可能になる。通貨が使用され、米軍の命令による作業に賃金が支払われるようになるとともに、生活物資が無償から有償の配給となる。また米国の諮問機関として沖縄民政府が設置され、基礎的な面での行政機構が成立する。海外からの帰還が開始されて人口が急増し、日用品の不足が大きくなって、その為に琉球貿易庁が設置されて日用品の輸入につとめたのもこの頃である。この時期の生活を支える日用雑貨には、台湾・九州からの密輸による闇物資、兵器の残骸の再生、米軍施設からの窃盗・横流しなどが多く、社会的な混乱状況がはなはだしかったといえよう。

米軍は、混乱した住民の為に、広報活動を行う必要から『うるま新報』を発刊、また画家や芸能人を民政府の公務員に採用して、住民慰安の為の演劇活動等を始めるようになった。これは、戦後の沖縄における文化政策とよぶにふさわしいものの開始を示すが、『うるま新報』は戦闘中に散逸した活字を拾い集めての印刷であり、一切が間に合わせのものでしかなかった。

一九四八（昭和二十三）年、ようやく住民に自由な企業活動が認められ、銀行が設立、税制も整備されるようになる。この頃になってようやく社会的な諸制度が整えられ、住民も米軍に対する要求をはっきりと示すようになった。政治運動も活発となり、混沌の中に一応の落ちつきをみせ始めた時期である。民間の

常設の劇場がつくられ、『沖縄タイムス』『沖縄毎日新聞』（現在廃刊）などの新聞が謄写印刷で発刊されるようになり、『うるま新報』が民間経営に移ったのもこの年であった。住民の手によって、みずからの望むかたちでの文化活動がようやく開始するのである。

ところが、一九四九（昭和二十四）年の中華人民共和国の成立を経て、一九五〇（昭和二十五）年に朝鮮戦争が始まると、沖縄の状況も急激に変化し始める。すなわち、極東軍事戦略体制の拠点として、沖縄が恒久的な軍事基地化し始めるのであり、米国の沖縄統治政策は、専ら基地保有の為に、基地機能を全面的に効率的に発揮する目的でもって、実施されるのであり、それが一九五〇年代の米軍施政の一貫した特徴となるのである。

恒久的な軍事基地の建設は、一九五一（昭和二十六）年になると「基地建設ブーム」状を呈し、清水建設、銭高組など「本土」の大規模の建設業者が大量に入りこむことになる。そして、それらの工事で劣悪な労働条件を強いられた労働者が争議をひきおこすと、すかさず米軍の弾圧を招くという状態が始まった。土地の強制的な収用に抵抗する住民に対して武装兵をさしむけ、その収用を合法化するために、「土地収用令」を公布する（一九五三年四月）など米国の強圧的な政策遂行が目立つようになるのである。

このような統治策は、一九五三（昭和二十八）年十一月に沖縄を訪れたニクソン米副大統領の〝共産主義の脅威のある限り沖縄を保有する〟という宣言や、一九五四（昭和二十九）年に続いて五五年、五六年とくりかえし〝沖縄基地の無期限保有〟を宣言したアイゼンハワー米国大統領の一般教書等に基づく政策であったことは確かである。

このニクソン宣言にみられる〝反共軍事基地〟としての沖縄保有の体制は、住民に対する政策においても、反共産主義政策として現われた。労働者の祭典といわれる〝メーデー〟を共産主義者の策謀として警告したり、武装兵を出動させたり（昭和二十八年）、日本復帰運動を共産主義にくみするものとする警告（昭和二十九年）、沖縄人民党に対する弾圧（同年）など、米軍の住民に対する政策は、反共的な色彩をむきだしにしたものであった。

このような米軍の強圧的な政策に対して住民の側での抵抗はあったものの、それは自然発生的・個別的であって、一般的なものとして未だ充分なものではなかった。心情的には、米軍の統治策に対する反発は広範に存在してはいたが、言論・表現に対する規制が厳しいということもあって、それらの反発が組織化されることは困難であった。

したがって、この時期の文化活動も停滞したものとなっている。この時期より先、一九四八（昭和二十三）年から四九年にかけて、沖縄タイムス、琉球新報などの新聞社から『月刊タイムス』『うるま春秋』などの雑誌が出され、その他『映画・演劇』など、多彩な出版活動がみられ、それらの雑誌を中心に表現活動が盛んになりかけていたが、それも一九五〇（昭和二十五）年に入ると相ついで廃刊され、文学活動も急速に衰えるのである。新聞紙上で、風俗小説的な作品が連載されたり、詩や俳句・短歌などでは少数のすぐれた作品が発表されてはいたものの、一般には低調をまぬがれなかった。

先に、この一九五〇年代初期の米軍の反共政策にもとづく強圧的な統治に対する住民側の心情的な反発の存在を述べたが、文学の面では、たとえば当時の琉球大学の学生らによって『琉大文学』誌が発刊され、

前述のような反発の意志を表現しようと試みることもあったが、これも一般化されるに至らなかったのである。

このような一九五〇年代初期の米国の施政方針は、一九五五（昭和三〇）年以後になると大きく転換を示し始める。これは、一九五五（昭和三十）年一月の、『朝日新聞』による「米軍の沖縄民政を衝く」という特集記事を契機に、沖縄の米軍統治のありかたが広範囲に問題化したことによる。この記事によって、それまで露わにされなかった沖縄の政治的・社会的な状況が一挙に日本国内だけでなく国際的にも問題となったのである。〝アジア法律家会議〟や〝アジア諸国会議〟などで沖縄問題がとりあげられる契機となるなど、その波紋は大きかった。

これらの動きはやがて、米下院軍事委員会軍用土地問題調査団（プライス調査団）の来島（一九五五、昭和三十年十月）、国際自由労連調査団の来島（一九五六、昭和三十一年五月）というかたちで具体化された。

このように、軍用土地問題、人権問題を中心に、沖縄問題が国際的な広がりで取りあげられ、米軍の施政のありかたが厳しく追求されるようになると、これらの国際的な世論を背景に、沖縄では空前の住民運動が展開されるようになる。一九五六年から一九五七年にかけての所謂「島ぐるみ闘争」がそれで〝軍用地料の一括払い〟〝新規土地接収〟等に反対して連日のように大衆行動が展開された。この「島ぐるみ闘争」は、米国の経済的なしめつけなど巧妙な政策によって長く続くことはなかったが、この時の住民運動の昂揚は、のちのちにまで大きな影響を与えた。沖縄の中心である那覇市長に「赤い市長」として米軍から眼のかたきにされた人民党の瀬長亀次郎を選び出したのも、いわば「島ぐるみ闘争」の残したものだと

いえよう。

「島ぐるみ闘争」とよばれたような米国施政に対する住民運動は、沖縄の貨幣をドルに切り換えたり（一九五八年）、あるいは軍用地代を一挙に支払うなどの経済的な政策のもとで一種の消費ブームが起こり、そのなかで一時期停滞するが、一九六〇（昭和三十五）年代に入ると新たな形で抬頭した。それは一九六〇（昭和三十五）年四月に結成された「沖縄県祖国復帰協議会」を中心とする「祖国復帰運動」を軸に展開する。

これは、それまでの住民運動が、個別的な対象、事件に対応する形で組織されていたのに対し、これらの全ての〝諸悪の根源〟は米軍支配にあるとして、米軍の支配からの脱却によって問題の解決を一挙に図ろうとするものであった。「異民族支配からの脱却」というスローガンが定着するのもこの頃からである。

このような沖縄内部の動向は、一面では沖縄をめぐる国際政治の動向の影響も受けている。アイゼンハワーからケネディへと米国大統領が交替し、日本では池田首相の登場によって経済の高度成長と〝日米新時代〟が唱えられるようになった。これは、沖縄に対する日本の潜在主権を認めると共に、日本政府及び財界からの援助と投資が大幅に認められ、沖縄に直接的な影響を与えたのである。

このことは、それまでと違って、沖縄と日本との結びつきをあらゆる面で強めることになる。沖縄の経済が、日本の経済圏に組み込まれ、沖縄の政財界が、日本の政財界との結びつきを強めることで、日本政府の意向が沖縄の政治に影響力を持ち始める。そして一方では、沖縄の「祖国復帰運動」が、「本土」の「沖縄返還運動」と強い結びつきをみせるようになった。

一九六三（昭和三十八）年暮から激化したベトナム戦争では、翌年になると米軍の航空機の発進基地とし

て沖縄が利用されるようになり、このことが沖縄の住民の危機感を強めて、復帰運動を一層盛りあげることになった。

一九六〇年代後半の沖縄の状況は、多少の紆余曲折はあるものの、全面的に復帰への道を進むことになる。むろん、そこには、日本へ復帰することによって個人的に損害を受ける人達、あるいは専ら基地に依存することで生活を支えていた人達の間に、将来に対する不安感から復帰運動に対する反発がみられたが、ひとたび復帰への軌道に乗った政治的な体制はもはや後戻りを許さないようになっていた。

一九六五（昭和四十）年一月の佐藤・ジョンソン会談では、沖縄返還についてふれていないが、二年のちの昭和四十二年十一月の第二次日米首脳会談では明確に施政権返還の日程を共同声明に盛りこむように変化しているのである。こうして、沖縄の復帰の実現が具体的な日程にのぼるにつれて、沖縄の住民運動も勢いを増す。復帰運動の中心となった教員の政治活動を規制する「教公二法」の立法の阻止（一九六七年）、主席公選の実現（一九六八年）などはその一連の結果であったといえよう。

こうして、一九六〇年代後半に入って「祖国復帰運動」が盛んとなり、これらの住民運動の盛りあがりと国際的な政治の動向があいまって、一九七二（昭和四十七）年に、沖縄の施政権返還が実現されるが、沖縄の施政権返還の実現が具体的なタイム・テーブルにのぼるにつれて、「復帰」の内容を問いかける動きが表面化してきた。そこには「帰るべき日本」の現実の状況が問題となり、「憲法の空洞化」と共に「沖縄の主体性」を問いかける姿勢が強くみられた。米軍の基地を温存するかたちで復帰することを拒否するという主張も現われたのである。

そして、賛否両論の渦巻くなかで、沖縄は昭和四十七年五月施政権の返還をみたが、そこでは、戦後の沖縄の歩んできたその歴史の重みの故に、そしてその歴史過程が、米国の軍事占領体制の中での独自のものを持っていたために、さまざまな問題をひきおこし、そしてその問題の解決を困難にしているのである。

以上、かいつまんで、文学を生みだす環境としての沖縄の戦後の歴史過程を概括した。この過程を要約すれば、次の通りに整理できよう。

①敗戦後から昭和二十四年頃までの空白と混乱の時期。

②昭和二十五年の新中国の成立から朝鮮戦争を契機とする基地建設と反共政策の強化された時期。

③昭和三十年頃の「島ぐるみ闘争」を経て米軍政に対して抵抗運動が激化しその後沈滞していく時期。

④昭和三十六年頃の消費ブームの中で大衆社会的な状況が現われる一方、「祖国復帰運動」が定着する時期。

⑤　昭和四十年頃の「祖国復帰運動」の昂揚の中で「祖国」と「沖縄」が新たに問いかえされる時期。

以上簡単に要約したが、これはきわめて便宜的なもので、実際にはもっと複雑であり、時期区分も、更に詳細に検討されなければならない。(2) また時期区分の視点も問題となるであろう。しかしここでは、文学活動の環境を展望するために必要な点だけに限って整理したのである。

さきに、沖縄の戦後の文学が政治的な状況に密接にかかわっていることを一つの特徴として指摘したが、本節での概観によっても伺えるように、それは文学だけではなく、沖縄そのものが、国際的・国内的とを問わず、多く政治的状況の渦中において処理されてきたという事情を物語っている。米国の沖縄に対する

施政のありかたが、極東におけるアメリカの戦略・政策に依拠するものである以上、それは極めて政治的なものとして沖縄の人間の生活にかかわってくるものであったし、日本政府の沖縄に対する政策が、対米外交問題の領域に属する以上、これも政治的なものとして処理されるものであった。

したがって、戦後の沖縄の文学が政治的状況に大きく規定されていることは、まさしく沖縄の人々の生き方が政治的な状況と深くかかわっていたことを意味するのであり、その点でも沖縄の戦後の文学活動は、住民のそのような意識のありようを反映したものであったといえよう。そしてそこに、よくも悪くも沖縄の戦後の文学の保持する特質が伺えるのである。

(1) 沖縄タイムス社刊「沖縄の証言」上巻。

(2) 新崎盛暉「沖縄『問題』の二十余年」(太平洋出版社刊、中野好夫編「沖縄問題を考える」所収)では第七期に時期区分を試みている。

三、文学の展開

前節で、沖縄の戦後の歴史過程を展望したのであるが、ここでは主として文学活動の様相を時間的な経過にそってとらえたいと考える。さきに述べたように、沖縄の戦後の歩みは、国際的・国内的政治状況に大きく影響されていて、その点で変化が激しかったのであるが、文学の場合は、そのような政治的・社会的状況の変化がそのまますぐさま現われるということはない。文学活動は、先行する文学とのかかわりも

あって、複雑に屈折したりあるいは錯綜したりするので、簡明な時期区分も困難であるが、それらを念頭において時期を区分するとすれば、凡そ次の三期に区分することが可能であると考える。この各々の時期と、各時期のおおよその特徴を示すと次の通りとなるであろう。

第一期　一九四五（昭和二十）年（敗戦）～一九五一（昭和二十六）年頃

この時期は、敗戦の虚脱と空白の中から次第に文学創造の機運が盛りあがってくる時期である。この時期は、前節で述べたように、収容所の生活から始まり、やがて民間の手による新聞・雑誌が発行されて住民の文化的な欲求をみたすようになった時期にあたっており、文学活動としては、文学の理論や方法的な自覚は乏しいながらも意欲的な文学活動が行なわれていた。

第二期　一九五二（昭和二十七）年頃から一九六一（昭和三十六）年頃まで

この時期は、米軍の反共的な強圧的な政策が強まり、それと共に、この米軍の政策を軸にして住民運動が激しい動きを示すいわば政治の季節である。このことは文学活動の上にも現われており、米国の植民地的な統治政策に対する抵抗の文学を主張した『琉大文学』がそれである。この時期には他に主として詩の面で、方法意識を明確に示し始めた『珊瑚礁』同人、短歌の『九年母』など、グループとしての文学活動が盛んになっている。前期の文学理論や方法的な自覚の乏しいことについての反省が強く現われており、戦後に登場した作者たちと、戦前から活動してきた人達の間に世代の交替がみられる。

第三期　一九六二（昭和三十七）年以降

この時期は、社会的・政治的には、「祖国復帰運動」を軸に沖縄の諸状況が展開した時期であるが、文

学活動の面では、文学意識や方法が多様化し、個人的な詩集や雑誌、あるいは同人誌が輩出する時期である。そしてその中で、「復帰運動」の進展にともなって、「沖縄」そのもののもつ意味を追求する動きも出てくる。沖縄タイムス社が『新沖縄文学』と題する雑誌を発行して文学活動に刺激を与えたのも、この時期である。

以上、沖縄の戦後の文学活動を三つの時期に区分して略述したが、この区分も仮説である。もっと詳細に検討すれば、それぞれの時期を、更に細分化して把えることも可能であるが、ここでは、全体の展望を主とした為に、以上の三期に区分したものである。つぎに、以上の三期の時期区分に従って、その具体的な展望を試みたい。

1　第一期

さきにもふれたように、この時期はまず捕虜としての収容所生活から始まる。この時期には印刷によって文学作品を発表するという機会もないので、個人的に俳句や短歌を作ってわずかに心を慰めていたと伝えられる。「米軍の俘虜収容所で、浮虜の一人として、毎日を無為におくるなかに、アメリカ軍の支給するライスの袋をはがして、たんねんに重ねて、手製の手帳をつくった私は、どこからか探し当てた鉛筆をなめなめ書いた」[1]と、牧港篤三は回想しているが、その頃の文学活動は、いわば発表のあてもなく作品を書いていたので、他の人々の場合も牧港と大同小異であったにちがいない。

しかし、このように短歌や詩を書いていたのは、戦前に多少とも作歌・作詩の体験を持っていた人々であって、多くは心を慰めるものとして、伝統的な歌（琉歌）に頼っていたものと考えられる。そして、そのなかですぐれたものは節をつけられ多くの人に歌われ、中には今も歌いつがれているものもある。

なちかしや沖縄、戦場になとて
　世間おまんちゅの流す泪
泪呑んで我身や、恩納山登て
　おまんちゅと共に、戦忍で
（以下略）　（屋嘉節）

これは、屋嘉捕虜収容所で誰からともなくつくられ歌われたといわれるが、その他にもかなりの数の琉歌が歌われていたという。

やがて、世の中が落ちつきを取り戻し、収容所が解散され、各々の出身地への引きあげが始まる頃になると、民政府の手で、各地に慰問の為の演劇団が派遣されるようになる。その頃は演劇・音楽が主体でまだ文学活動は充分ではなかった。

一九四五年七月、『うるま新報』と題して広報紙的な性格の新聞が散逸した活字を拾い集めて出版されたが、週一回の発行であって文芸作品を発表する余裕はなかった。その後、沖縄民政府は詩・短歌・俳句を募集、「心音」と題するコラムを設け掲載発表するようになり、一九四七（昭和二十二）年末頃になってようやく自由投稿が行なわれるようになったといわれる。(2)

一九四七（昭和二十二）年、民間の商業新聞の発行が許可されると、『うるま新報』の他に『沖縄タイムス』『沖縄ヘラルド』など相ついで登場、紙面を競うようになる。そしてその結果として文芸作品を掲載するようになって文学活動も盛んになった。また、「本土」から出版物が入らないこともあり、それらの雑誌などの活字文化への要求に応えて、『月刊タイムス』『うるま春秋』などの雑誌が発行されるようになった。こうして文芸作品の発表の場が拡げられ、文学活動も盛んになる。

これらの新聞雑誌は、新しい執筆者の登場を求めて、盛んに懸賞募集を行ない、このことがこの時期の文学活動を盛りあげることになった。戦後の沖縄の文学活動の中心的な担い手となった人達の多くは、これらの新聞雑誌によって登場したのである。

この時期の文学活動の特徴は、戦前から活動を続けていた人達が、すでに身につけている文学観にもとづいて、手なれた手法で作品をつくっており、この時期に登場した新人達の場合も、まだ明確に文学理念や方法を見出すことなく模索を続けていたことがあげられよう。

小説の面で戦後の作品の嚆矢となったのは、新人太田良博が『月刊タイムス』一九四九（昭和二十四）年三月号に発表した「黒ダイヤ」である。この作品は、敗戦前後のインドネシヤで、主人公「私」と、「黒ダイヤ」のような瞳をもった少年「パニアン」との一種の友情を描いた私小説で、原稿用紙十五枚程度の短い作品であるが、均整のとれた表現でみずみずしいものをもっている好短篇である。

この「黒ダイヤ」をかわきりに、『月刊タイムス』『うるま春秋』などで創作が発表されるようになる。『うるま春秋』創刊号（昭和二十四年十二月十日発行）には、戦前、歌人として、また小説の面でも活躍し

た山城正忠が、九州の疎開先での体験を描いた「香扇抄」を発表している。[3] その他、新垣美登子、山里永吉、江島寂潮、宮里静湖など戦前の創作体験をもつ人達が作品を発表するようになった。

一方さきにもふれたように、この時期の雑誌・新聞では懸賞募集を行なっていて、それが新人の登場をうながした。

一九四九（昭和二十四）年十二月号『月刊タイムス』は、さきに募集した作品の当選作を発表している。創作では入選作に、「老翁記」（城龍吉＝大城立裕）、「花の果て」（江島寂潮）があり、他に佳作として、「王（わん）」（南禎光）、「小さい青空」（嶺哲也）があげられている。これと同時に募集した戯曲には入選作はなく、「国王公選」（名幸芳章）、「青空」（香椎都）が選外佳作となっている。

『うるま春秋』でも、創刊号で懸賞募集を行ない、翌一九五〇（昭和二十五）年五月号に入選作を発表した。入選作品は「ふるさと」（山田みどり）で、他に佳作として「帰郷」（冬山晃）、「春陽孤り」（泊之男）、「紅色の蟹」（国本稔）、「神の使者」（宮良保）、「すみれ匂う」（亀谷千鶴子）などがあげられており、逐次『うるま春秋』や『うるま新報』に掲載発表された。

前の『月刊タイムス』の懸賞が、枚数が二十枚に制限されていた故もあってか全体として描きこみが足りないのに対し、「ふるさと」「帰郷」などはかなりすぐれたものとなっている。

その後、一九五〇（昭和二十五）年秋に、『沖縄ヘラルド新聞』が「ヘラルド文学賞」を募集、その結果、二等に「農夫」（山田みどり）、「泥濘」（泊之男）の両篇、選外佳作に「馬車物語」（城戸裕）があげられ、翌年に同紙に逐次掲載発表された。[4]

こうして、既成の作家たちとならんで、戦後の文学を担う若い人達が輩出したが、一九五一（昭和二十六）年、『月刊タイムス』『うるま春秋』が相ついで休刊し、新人登場の場がなくなる。しかしこの頃になると、新聞連載小説が盛んになり、沖縄を舞台にした作品が『沖縄タイムス』『琉球新報』に連載されるようになった。

新聞小説では、戦前から創作を続けてきた山里永吉が、一九五一（昭和二十六）年七月「那覇は蒼空」を発表したのをかわきりに、新垣美登子、石川文一、宮城聡などが次々に作品を発表したが、一方戦後の若い人達、大城立裕、嘉陽安男（泊之男）、船越義彰らも、これらの既成作家達に肩を並べて、新聞小説を手がけるようになった。これらの若い書き手は、既成の作家にみられぬ新鮮な感覚と新らしい手法で新聞小説に新生面をきりひらいたが、いずれも通俗的な筋立てを離れることができず、わずかに「白い季節」（大城立裕）の巧みな構成と、「新説阿摩和利」（泊之男）の新しい歴史解釈が注目されるにとどまっている。

詩の分野は、小説にくらべると早くから活動を始めている。一九四七（昭和二十二）年牧港篤三が個人詩集「心象風景」を謄写印刷し知人に配布したといわれるが、その後『うるま新報』が発行され、その中に「心音」欄が設けられると、俳句や短歌とならんで詩も多くつくられるようになった。この時期の詩作は、戦前に活躍した牧港篤三の他、仲村渠、池宮城積宝、宮里静湖など戦前から詩活動を続けてきた人々が中心となっている。

なかでも、戦前北原白秋の主宰する『近代風景』に加わり、近藤東や岡崎清一郎らと肩を並べて活躍し、昭和四年雑誌『改造』の創刊十週年記念懸賞に詩の部門で、津嘉山一穂とともに佳作に入選した体験をも

つ仲村渠と、その仲村渠と共に戦争中「榕樹派」グループを組織して詩作を続けた牧港篤三の両人がすぐれた詩を発表している。

「夜中だか、朝だかわからない。／　ぞろぞろと、民族が移動する。／　男は妻をかばい、親は子の手を引いて老人と子供たちを、先頭に　／　ぞろぞろと民族が移動する。」に始まり、「体れつの中からは信念のないロマンや、軽薄なセンチメントを捨て去るのだという。／　烈風のような声すらきこえる。／夜中だか、朝だかわからないが／　ぞろぞろと民族が移動する。」という、過去に対する批判と未来への渇望を激しく歌った牧港篤三の「啓示」は、[5] ある意味で、戦後の詩活動で重要な意味を担ってきた作者のありかたと共に、現在でも注目に価する作品であるといえるだろう。

戦後登場した詩人としては、安谷屋家宏、国本稔、太田良博などがいる。小説「黒ダイヤ」で新鮮な感覚をみせた太田良博は、「那覇」や「姫百合！／それはかつてヴェルダンに咲いたというケシ(ママ)の花よりもっと可憐で血なまぐさい／」で始まる、戦場で散ったひめゆり部隊の乙女たちをうたった「無言の歌」（一九四七・九・十二日付『うるま新報』）など、主として『うるま新報』の「心音」欄に多くの作品を発表し、そのあざやかなデヴューは注目を集めた。また、この時期の末には、のちに「珊瑚礁グループ」の中心となった、安次嶺栄一、船越義彰、大湾雅常らが新人として登場し始めている。

短歌は、『うるま新報』が軌道に乗り、文芸面に紙面を割くようになった一九四六（昭和二十一）年十月頃から発表され始めた。管見によれば、一九四六（昭和二十一）年十月十一日の『うるま新報』（第四十六号）に「心音」欄が始めて登場し、そこに、戦前からすぐれた短歌を発表していた西幸夫、池宮城積宝が短歌

を発表したところから戦後の文学活動は開始したものである。この欄で発表された作品は、それぞれ「立秋」（西幸夫）、「みどりの丘」（池宮城積宝）と題されており、一首ずつ例をあげれば次のようなものであった。

福木の実路のかたへに落ちこぼれしのびやかに秋は近づきにけり　（西幸夫）

萠え出づるみどりの丘にまろねしてはてしなき海のはてをしぞおもふ　（池宮城積宝）

短歌の場合も、詩と同様に戦前から作歌活動を続けてきた歌人がこの時期には中心となっており、前記、西（島袋全発）、池宮城の他西森晴二郎、名嘉元浪村、古波鮫弘子、小林寂鳥などが活躍している。この頃には、「みんとん社」「伊江短歌会」「民政府短歌俳句会」があって、作品を『うるま新報』の「心音」に発表しているだけであり、まとまった歌集もなくグループもすくなかったようである。

一九五〇（昭和二十五）年七月、『沖縄ヘラルド新聞』が、小林寂鳥を選者として「ヘラルド歌壇」を設けると、続いて他の新聞にも歌壇が設けられ、新人の登場が盛んになる。照屋寛善、名渡山兼一、泊之男、呉我春夫などが、コザ中央病院モデル病棟で「モデル病棟短歌会」をつくったのも一九五〇年のこの年であり、他にも「梯梧短歌会」があって、春山行夫が活躍したのもこの頃だったという。その後一九五〇年代に、沖縄歌壇の中心となった「九年母短歌会」の基盤は、この時期に育くまれていたといえよう。

俳句も、短歌と同様に、戦前から句作をこころみた人達が、最初は中心となっていた。比嘉時君洞、原田紅梯梧、松田賀哲などがそれであり、『うるま新報』の「心音」欄を舞台に作品を発表していた。一九四六（昭和二十一）年頃の「民政府短歌俳句会」で主として指導にあたったのは松田賀哲（草花）であった。

この頃には「イシクビリ句会」の活躍がめだっている。

一九五〇年の『沖縄ヘラルド新聞』では、前記「ヘラルド歌壇」の他に原田紅梯梧を選者とする「ヘラルド俳壇」を設け、新人の育成に努めているが、この時期になると、台湾から引きあげてきた数田雨条や、その他矢野野暮、国仲穂水、松本翠果、大見雅春、安島涼人などのベテランが集まって「みなみ吟社」を結成、ホトトギス系の写生句を多く詠んでいる。一九五一(昭和二十六)年になると、「赤木句会」が首里でつくられ、松本翠果、嵩元白雨、知念広径、嘉手苅紀章、玉城阿峯らが参加し、共にその後の句会隆盛のはしりとなった。

戯曲は、終戦直後の人心慰安のために演劇が民政府の手で盛んに行われたにもかかわらず、低調であった。これは、この時期の慰安のための巡回興業が、既成の俳優を中心にし、戦前の舞台に載せられた旧作を上演したことによるという。

その後、一九四七(昭和二十二)年、民政府では新しい演劇をめざして脚本の懸賞募集を行うようになった。この時の懸賞の結果は、一等に該当作品がなく、二等に「明雲」(大城立裕)、三等に「眠らぬ人」(山川泰邦)、「若人の歌」(川野宗幸)が入選したといわれる。[6]

翌年、一九四八年には、沖縄教育連合会が沖縄産業の恩人・先覚者を扱った脚本を募集し、更に一九四九年には学校劇の脚本を募集している。更に、前にふれたように、一九四九年十二月『月刊タイムス』の懸賞があり、『月刊タイムス』『演劇映画』等の雑誌にも、「罪のない罪」(中今信)、「湛水親方」(西幸夫)、などが掲載発表されている。

しかし、これらの多くは戯曲というよりも演劇の上演のための脚本か、でなければ、脚本とも戯曲ともつかぬものであった。これは、戦後の沖縄の場合、まず人心の慰安のための演劇活動であって、そのために脚本が要求されたということもあるが、それよりも、戦前からの沖縄の演劇の伝統が大きく影響していたといえよう。ここで、戦前からの沖縄の演劇の伝統についてふれる余裕はないが、簡単に言えば、戦前も戦後も沖縄の演劇は「歌劇」を始めその多くは「方言」による所謂「大衆演劇」であって、近代劇としての「新劇」運動は定着していなかったのである。とりわけ、この時期の演劇は、敗戦後の荒廃した人心に慰安をあたえるという目的を主としていたので、そこでは伝統的な作劇方法に依存する面が大きかったといえよう。

むろん、なかには「沖縄演劇文化研究所」（中今信主宰、一九四九年設立）のような、演劇の改良を主張した組織もなかったわけではない。しかし、これもみるべき成果をあげることなく終っている。

以上、昭和二十年の敗戦後から昭和二十六年頃までの文学活動の展望を試みたが、この時期の文学活動の特質は、戦前から活動していた人達が中心となっており、戦後登場した新人たちは少数であったこと、そして、これらの中心をなした人たちは、既に身に付けた旧い文学観や方法でもって文学活動を続けており、新人たちも、その意図はともかくとして、結果としてみる限り、文学観や文学方法について自覚的とはいえなかった。新人たちの古い世代に対する批判も見られず、方法において、素朴な実感的な態度に終始していることなどに、それをうかがうことができよう。

それは、当時の沖縄が周囲から隔絶させられていて、文学の上での刺激をうけることがなかったことや、

あるいは戦前の沖縄の文学活動が充分に成熟せず、したがって新人たちが学ぶに価する先輩の乏しかったことにもよろうが、何よりも文学活動がそれ自体として自然発生的なものであり、趣味的なもの以上に出なかったということにその原因は求められよう。

したがって、そこでは、日本の戦後文学が持っていたような、戦前の文学に対する批判を含めて、敗戦後の現実に対する主体的なかかわりも、自己の戦争体験に対する凝視やそれからくる思想的な苦悶も表現の上にみることはできないのである。

そして、このような文学活動のありかたに対する自省と批判が明確に現われるようになるのは、次の一九五二（昭和二十七）年以後、詩の領域における『珊瑚礁グループ』と、短歌の『九年母』、米国の抑圧的な支配に対する抵抗を主張した『琉大文学』などの活動が現われてからであるといえよう。

なお、この時期の文学活動にかかわるものとして注目されるものに、沖縄戦について記録が刊行されたことがあげられる。

一九五〇（昭和二十五）年三月、『月刊タイムス』では、沖縄戦記録文学の懸賞入選作として、「敗戦を聞く」（波川友広）、「無血の島」（宮田保）、「新生」（三木たかお）、「捕虜となるまで」（喜田栄）、「空しい反撃」（山田十郎）を掲載発表し、同じく十月には、沖縄タイムス社の社員スタッフ執筆による「鉄の暴風」を上梓している。翌一九五一年には、仲宗根政善編著の「沖縄の悲劇」が刊行され、沖縄戦の記録の先蹤となっている。

（1）「牧港篤三全詩集　無償の時代」ノート。

（2）「戦後の文学」、「琉球史料第九集文化篇1」所収による。管見によれば「心音」は当初、西幸夫、池宮城積宝などの作品

を掲載発表しており、紙面で判断する限りは、一般募集の形跡はみられない。更に検討されるべきであろう。

(3) 編集者のあとがきによれば、これが山城正忠の絶筆となったとされる。

(4) 前掲「戦後の文学」「琉球史料第九集文化篇1」による。

(5) 「演劇映画」一九五〇年七八月合併号。筆名はサンゴ・タロウとなっている。

(6) 前掲「戦後の文学」「琉球史料第九集文化篇1」

2 第二期

この時期の文学活動は、先にふれたように、文学的態度や方法に対する自覚が明確になったところにその特色をみることができる。そして、それは『珊瑚礁』『琉大文学』『九年母』などのような組織的な活動として現われ、太田良博・大城立裕など戦後登場した人達及びそれ以後の人達が中心となって活動しており、そこに文学を担う世代の転換をみることができよう。

そして、この動きが明確に現われたのは、一九五二(昭和二十七)年九月に登場した「珊瑚礁同人」のグループとしての活動からである。このグループは、当時、『琉球新報』に詩作品を発表していた人々が、安次嶺栄一を中心に、国吉灰雨(真哲)の斡旋によって定期的に作品を発表しようとしたものであり、定まった立場も主張もなかったのである。が、少くとも、前の時期の活動にあきたらず新しい詩活動を展開しようという意欲にみちたものであった。

「戦後の沖縄文芸は創作、短歌、俳句、戯曲、と各分野にそれぞれルネッサンスの狼煙が挙げられたにも拘らず、詩作活動は個人的趣向に止まり、何ら社会的な組織的展開がなされなかった。顧るに戦前の

沖縄詩壇は、山之口ばく、仲村渠、伊波南哲等々の他多数の良き先輩の倦まざる活動によって、この郷の人情風物の美景に優るとも劣らない詩壇を開拓した。戦争によって、この詩壇にも断層をみた。われわれはおもむろに立ち上がり〝血に染った神のバトン〟を採り上げ腰がいさゝかソウロウとしているが、ともかく走り出さねばならない。

と第一回に、芦峰（安次嶺）栄一が序を寄せている。[1] この芦峰の宣言にもみられるように、この同人の立場は、前期の「個人的趣向に止ま」る詩活動を批判し克服するところから出発しようという姿勢を明確に打ち出してはいるものの、グループとして主張も立場も明確ではない。というよりも、発表された作品からみる限り、同人は各々異った態度や方法を持ちながら、新しい詩活動の「社会的・組織的活動の展開」を試みるという一点において結集したようにみえる。そして、前期の詩活動のありかたを批判し克服することを通して各々の方法や態度の深化を意図したものであった。

同人としては、前記の安次嶺の他に、船越義彰、天願俊貞、伊良波長哲らが名を連ね、第一回では、安次嶺の「夜の狂詩曲」他、伊良波の「掌」、船越の「龍潭」、如月敏夫の「孤島図」他が発表されている。同人の詩活動は活発で同人も次第に拡大され、大湾雅常、池田和、池宮治、松島弥須子などを加えて、各各の資質と方法の異った作風をみせるようになった。[2] その後、一九五七（昭和三十二）年四月、「沖縄詩人グループ」が結成されると、珊瑚礁同人の殆ど全てのメンバーがこれに加わり、珊瑚礁同人としての組織は自然解消される結果となった。

このようにグループとしての主張は明確ではないにしても、ある程度明確な目的をもって活動を展開し

た珊瑚礁同人を始め、多くの人達にその明確な文学的立場と、方法についての自覚とを強く要求し、そのことによって大きな刺激を与えたのが、琉球大学文芸クラブのメンバーによる『琉大文学』である。

この『琉大文学』は一九五三（昭和二十八）年に発足し、同年七月に機関誌として『琉大文学』を創刊したが、発足当初は芸術至上主義を標榜するところの趣味的な性格のものであった。これがクラブとして明確な文学的立場を打ち出し、大きな刺激を与えたのは、翌一九五四（昭和二十九）年七月に発行された第六号からである。このグループは、当時激しかった米軍による土地の接収、反共主義にもとづく弾圧に対して真正面から抗議し、文学による抵抗を主張した。そしてその立場から、太田良博や大城立裕などの文学活動のありかたに批判を加えたのである。

この文学による抵抗の主張の理論的な根拠となったのは、当時のメンバーに影響を与えた小田切秀雄や佐々木基一らが『近代文学』『新日本文学』等で展開した「社会主義リアリズム論」であり、「祖国復帰」を主張することがそのまま共産主義者乃至はその同調者とされるような酷烈な政治状況のなかで、それゆえに政治的な抵抗をそのまま性急に文学活動のなかに盛りこんでいた。

しかし、『琉大文学』のこのような激しい主張は、その主張にくみするものもくみしないものも含めてその文学的立場や方法について明確な立場を要求することになり、否応なしに、各々の文学についての自覚を深めていったといえよう。『琉大文学』の指摘するような酷烈な政治的な状況は誰の目にも明らかであったのだから、問題はそれらの現実的な問題を文学上の直接的な主題とすることの是非につながり、したがってこれは、文学的立場や方法の問題としてとりくまざるをえないものとなったのである。

一九五四（昭和二十九）年十二月、『琉大文学』（第七号）は「戦後沖縄文学の反省と課題」という特集をくんでいる。そこでは、太田良博や大城立裕などこれまで文学活動を続けてきた人達の、同じ主題のアンケートに対する回答を掲載し、あわせて、「戦後沖縄文学批判ノート」（新川明）、「沖縄文学の課題」（川瀬信）の二評論を掲載している。そしてこれによって『琉大文学』の文学的立場と方法についての考え方が明らかになり、このことが逆に、太田や大城などこれまで文学活動を続けてきた人達にとっても、自己の文学的立場や方法を明確にせざるをえない契機をつくりだしたといえよう。

しかし、この『琉大文学』の文学的な抵抗を主張する立場は、作品の上でも米軍に対する批判を鋭く示すようになり、結果として米軍の弾圧を招くことになった。

一九五五（昭和三十）年二月発行の第八号が、発売後、米軍の圧力をうけた大学当局の手で回収され、続いて一九五六（昭和三十一）年三月発行の第二巻第一号（第十一号）が原因で半年間の活動停止処分をうけたのである。『琉大文学』のメンバーは、その主張にもみられるように、当時の琉球大学の学生運動の中心的なメンバーとなっており、「島ぐるみ闘争」の激しかった一九五六（昭和三十一）年八月十七日、『琉大文学』の編集責任者である嶺井政和、豊川善一の他、喜舎場順などがその反米的言動の故に退学させられる事態が発生し、約一年間、活動が停止するということもあった。

このような弾圧と、文学の方法などについてのクラブ員の内でさまざまな悩みを背負いながら、『琉大文学』は翌一九五七（昭和三十二）年四月、儀間進、伊礼孝などの手によって再刊され、その後、清田政信、岡本定勝、中里友豪などが引き続いて編集を担当するようになった。しかし、この清田などが中心になっ

た『琉大文学』は、前の時期とは明瞭に異ったありかたを示すようになっている。この時期の『琉大文学』は前の時期の新川明などの主流を批判し、政治的な主張よりも個の内面を掘り下げるところに表現の基盤を置くようになったのである。

このように『琉大文学』は、この時期の政治的な状況と厳しく拮抗するかたちで文学活動をおしすすめたために、それがさまざまな波紋をまきおこし、また活動そのものも複雑な屈折をともなったのであるが、逆にそのためにこの時期の沖縄の文学活動の流れを象徴的にあらわす存在となりえたといえよう。

この時期には、前記の『琉大文学』のメンバーの一部と、池田和、真栄城啓介など詩活動を行なっていた人たちの参加する「新沖縄文学サークル」が結成され、非合法出版による抵抗文学の雑誌『前衛地帯』が発刊されている（昭和三十年十二月）。

しかし、このような非合法的な出版活動は持続するのに困難な条件をともなっており、『前衛地帯』も創刊号を出版しただけで活動を停止した。

一九五六（昭和三十一）年、太田良博、大城立裕、嘉陽安男の他、「珊瑚礁グループ」で活動していた船越義彰、大湾雅常、池田和、『琉大文学』の新川明、川瀬信、俳句の松本翠果、短歌の富山晶一などが加わって、「沖縄文学の会」が結成された。

祖国においては再び民主主義的文学運動が建て直され、堅実な歩みをすゝめて着々その成果をあげつゝあるが、沖縄の現状を顧りみたとき、我々は沖縄の文学的空白が余りにも長く、そして大きいのを悲しまずにはおれない。これまでそこに、幾つかの文学運動の芽生えはあり、試みはみられたが、それが

中途で挫折したことは戦後十年の歴史が示す通りである。そこで我々は、沖縄における巾広い層を結集して、十年の文学的空白を取りかえす仕事を始めなければならないことを痛感し、ここに新しい文学的出発を始める。

以上は、「沖縄文学の会」の創立趣意書の一節であるが、この部分にも示されているように、この会の性格としては、各々の文学観や方法論的な立場の差を認めた上で、幅広く文学活動を行う人達を集め、それまでの文学活動の停滞を克服しようとするものであった。

そして、会の機関誌として『沖縄文学』を発刊し、意欲的な活動を展開しようとした。当初は、その意欲にふさわしく、創作では「二世」(大城立裕)、「かわいた土」(池田和)などが二号に掲載され、評論では「珊瑚礁の詩人たち」(新川明)、「沖縄文壇史その一」(太田良博)が創刊号に発表された他、詩でも真栄城啓介、船越義彰などが力作を発表して充実したものであった。が、経済的な事情で会の運営が行き詰まり、創刊号を昭和三十一年六月に、二号を翌三十二年十一月に発行しただけで活動を停止した。

この「沖縄文学の会」と並行したかたちで結成された詩人のグループに、「沖縄詩人グループ」がある。これは、「沖縄文学の会」が文学の各分野を網羅した組織であったのに対し、純然たる詩人だけのグループとして昭和三十二年に結成され、機関誌『環礁』を七月に創刊した。このグループは、戦前から詩活動を続けてきた牧港篤三の他、旧『珊瑚礁』同人の安次嶺栄一、池田和、大湾雅常、船越義彰、池宮治、『琉大文学』の新川明、松島弥須子、その他真栄城啓介などが主なメンバーであった。

このグループは、既に各自の作風を身に付けた力量のあるメンバーによって構成されていたから、グル

ープとしての活動も安定していたといえよう。このグループの機関誌『環礁』の題名の由来について、池田和は「世界地図を拡げてみるまでもなく、沖縄人であれば誰だって沖縄の位置は知っている。(略)だが、その地理的位置が現代において如何なる意味をもつものであるか、またこの島の小さい存在の上に積み重ねられる時間——孤島苦の歴史とでも言おうか——を真剣に考えている人は少ないようだ。そういう手のこんだ意味での『沖縄』の位置なるものが、詩をつくる上に問題となるかどうか、また、その位置を確実に把握することが詩人の仕事に入るかどうか、即答は出来ないが、少くともそこに立たされてあるからにはその足下を見詰めないわけにはいかないだろう。『環礁』は、そうした主意での命名である」と創刊号の「同人抄」で述べている。

この池田和の言葉は、沖縄詩人グループに加わったメンバーが、各々異った個性と作風を示しながら、なお共通に維持していく基盤として、「沖縄」の歴史とその現実の状況をとらえていたことを示すものであろう。感傷的な抒情詩から出発した船越義彰が、ここでは「冬の日の手紙」や「ある会話」などにみられるような戦争と戦後の沖縄の状況と真正面から取り組んだ詩を試みたり、あるいは牧港篤三が「アイヌ民族」と「沖縄人」を二重写しにとらえた「コタン」を発表しているところ等に、このグループの新しい特質をみることができたのである。

このグループにはのちに、糸数正雄、太田朋など新しいメンバーが参加し、全体として活発な活動を示したが、次第に般越義彰が沈黙するなど、一九六〇年代に入ると活動は停止した。

この時期の「沖縄詩人グループ」と『環礁』とほぼ似たような位置を短歌において示したのが「九年

母短歌会」とその機関紙『九年母』であった。さきにも少しふれたように、「九年母短歌会」は、一九五〇（昭和二十五）年コザ中央病院の「モデル病棟短歌会」を母胎に結成されたので、その中心は、呉我春男、照屋寛善などである。そしてそれが、沖縄で作歌活動を続ける多くの歌人を結集するかたちで組織され、一九五四（昭和二十九）年三月には機関誌『九年母』を発行するまでにこぎつけた。当初は、どちらかといえば戦前から作歌活動を続けてきた山城正忠、山田裂琴などの作品が多く発表されたが、のちには松田守夫、前川守人などの他、大城宗清、伊良波史夫などの新人の活躍が目立っている。歌風としては、どちらかといえばアララギ系統の作風のものが多く、作品の水準もきわめて高い。しかし、一九五五（昭和三十）年、短歌会の中心となっていた呉我春男の病没後は、次第に会としての活動はおとろえて、むしろ個人的な作歌活動の方に力が注がれるようになっている。

以上のように、この時期の文学活動は、『環礁』にしろ『沖縄文学』にしろ、あるいは『九年母』にしろ、発足当初は明確な主張をもってはなばなしい活動を示しているが長く続かないという点で共通している。これに対し「沖縄俳句会」の方は持続的な活動を示した。この会は、一九五六（昭和三十一）年に、それまでの俳句結社を糾合して組織したもので、久高日車を顧問に、会長に知念広径があたり、矢野野暮、嵩元白雨らが活躍している。

しかし、何といっても沖縄の俳句を支えてきたのは、『沖縄タイムス』の「タイムス俳壇」と『琉球新報』の「琉球俳壇」であり、「タイムス歌壇」「琉球歌壇」とともに広く投稿者をつのって現在に至っている。俳句では他に、松本翠果などの「中部俳句会」や「芳魂句会」「群星俳句会」などがあった。

以上概観したように、この第二期の文学活動は、第一期の素朴な趣味的な文学活動に対して、それを批判し克服しようとするところに特徴がみられる。そしてそれが文学的な立場や方法についての自覚を促すことになり、同様な志向を持つ人々の組織的な活動として展開することになった。その最初の動きが珊瑚礁同人の結成であったといえるが、米軍支配に対する文学的抵抗を主張する『琉大文学』の登場によって、それが一層推進されることになったといえよう。これは、その主張に賛成するしないにかかわらず、否応なく自己の文学的立場や方法についての検討を迫るものとして大きな波紋を呼んだのである。

ところで他に、この時期の沖縄の文学活動に大きな影響を与えるものとして特記されるものに、霜多正次の「沖縄島」の出版と「毎日出版文化賞」の受賞（一九五七年）がある。この作品は、戦後の沖縄の状況を鳥瞰図風に描きあげたもので、登場人物の掘り下げにもの足りなさを感じさせたものの、時間的な経過にそって沖縄そのものを大きく描き出したもので、沖縄で創作活動を行なっている人達に多大な刺激を与えたのであった。

（1）『琉球新報』一九五二年九月一日付。なお文中の「血に染った神のバトン」は山之口貘の詩「喪のある景色」の一節でこにも、同人の意欲をみることができよう。

（2）この『珊瑚礁』同人の詩については新川明「『珊瑚礁』の詩人たち」（『沖縄文学』創刊号所収）で詳細に論じられている。

3　第三期

この時期の文学活動の特色は、文学的な立場や方法の多様化と、同人誌や個人雑誌、あるいは個人の詩

歌集の輩出にみいだすことができる。また、第二期の文学活動が、多かれ少なかれ、米軍による植民地的な支配によるきわめて尖鋭な政治状況のもとで、何らかの形でそれとむきあわざるをえなかったのに対し、この時期の文学活動は、どちらかといえば個人の内面を掘り下げるか、そうでなければその政治的な状況の内にひそんでいる沖縄の人間の意識のありようを深く追求しようとする姿勢が目立っている。

このような動きは、「沖縄詩人グループ」が機関誌に『環礁』と名付けた姿勢や、あるいは牧港篤三の作品のなかに部分的には見られてはいたが、第二期の一九五〇年代に対する批判を通して、明確な文学的立場として示したのは、『琉大文学』の一九六〇年代のグループであった。清田政信らのこの時期のメンバーは、主として前期の『琉大文学』のありかたを否定し、文学の自律性を主張し、表現する者の主体的な位置を問いかけたのである。

これは、一九五〇年代後の、所謂「島ぐるみ闘争」の挫折したのちの停滞した政治的な状況に対するいらだちや怒りをも内に包んではいた。だから、ここでは状況にかかわる個人のありかたやあるいは意識のありようを問うとしても、闘争の挫折後の状況に対するいらだちや怒りという共有するモティーフがあり、その点でのグループとしてのつながりは強かった。しかし、このような共有するモティーフも時間的な経過をへると次第に薄れ、表現主体の個人的なありかたのみが強調されるようになり、各々の人間がそれぞれの関心に従って表現を試みるようになる。いわば文学的立場や方法の多様性が強くなるのである。

一九五〇年代の『琉大文学』の「政治主義的な文学」の影響を多少なりともうけ、琉球大学の学生として一応学生運動にかかわりをもったこのグループの場合には、そのようにグループとしての共有のモティ

ーフがあって、そのため一つの組織的な五〇年代の文学活動に対する批判を提起することになったのであるが、『琉大文学』以外の人々の場合は、このような共有のモティーフも少なく、個人的な立場と関心でもって文学活動を展開するようになっている。

一九六〇年代に入ると、既に「本土」の文壇の動向も直接に伝わっており、それらの動向の直接的な影響もあって、文学的立場や方法の多様化に一層拍車がかかったという事情もある。これより先、一九五六（昭和三十一）年に大城立裕が雑誌『新潮』の「同人誌推薦小説募集」に応募、入選したり、『環礁』の活動が詩誌『詩学』の特集号で紹介（一九五八年）されるなど、「本土」とのつながりは強まっていたが、この時期になるとそのつながりは一層強まり、直接的な影響をうけるまでになっていた。「島ぐるみ闘争」挫折以後の停滞した社会状況が、個人の内部へと眼をむけさせ、あるいは疎外感をかきたてるようになって、そのことが「本土」の文壇の動向の影響とあいまって、文学的立場や方法の多様化を招いたといえよう。

一九五九（昭和三十四）年八月「原点詩人集団」が結成されて雑誌『原点』を発行してのち、「塔文芸同好会」が結成されて機関誌『塔』を発刊（一九六〇年十一月）、続いて「詩現実の会」の『詩現実』（一九六一年刊のち『詩・現実』）、『ペロニカ』（一九六四年）、など同人誌が輩出するようになったのもこの時期からであり、そのことがこの時期の文学的立場や方法の多様なありかたを示しているといえよう。そしてそのような動向は『橋』『発想』の同人誌の発刊などを経て現在に至っている。

この同人誌の盛行とならんでこの時期の特徴の一つに、とくに個人詩集の刊行が目立って多いことがあげられよう。一九六三（昭和三十八）年に清田政信が詩集『遠い朝・眼の歩み』を東京詩学社から刊行した

のち、勝連敏雄の『羽根のある祭り』『翼から弾機へ』、仲程昌徳『お前のためのバラード』、池宮治『骨の歌』、岡本定勝『彩られる声』、神谷毅『廃虚を越えて』など自作を世に問う詩人たちが多く現われている。このような文学的立場や方法が多様化し、グループとしてよりも、個人としての文学活動の方が活発となり、同人誌が輩出するとともにその離合集散が激しくなるなかで、沖縄の文学活動を更に発展させようとして「沖縄タイムス社」が『新沖縄文学』を発行した。

これは、沖縄タイムス社がそれまで実施してきた、音楽、芸能、絵画などの各部門における芸術選賞を、文学の分野においても設定し、その対象となる作品の発表機関として、一九六六（昭和四十一）年四月に刊行したものである。そして小説、詩、俳句、短歌などの作品を募集し、宮城聡、大城立裕などの選考委員の選考を経て誌上に発表するという形をとるものであった。

そこでは、これまで文学活動を行なってきた大城立裕・嘉陽安男だけではなく長堂英吉、星雅彦など新しい書き手が登場したが、その他詩では、よしむら・ももさだ、仲地裕子、仲程昌徳、仲座元司など、短歌では石塚一徳、上原嘉善、兼城弘、佐久川政良、野田猛良など、俳句では瀬底月城、玉城盛一、知念広径、宮城阿峯、岸本マチ子などが数多く作品を発表している。

そのなかで、特に注目されるのは大城立裕が『新沖縄文学』第四号に発表した創作「カクテル・パーティ」で、第五七回（昭和四十二年度上半期）芥川賞を受賞したことであろう。これは、芥川賞の選評でも批判があり、その後もさまざまな批評をよんだものであるが、戦前・戦後を通じて、沖縄で始めて芥川賞受賞作品となったという点で、大きな反響をよびおこしたのであった。

この大城の芥川賞受賞は、沖縄で文学活動を行ってきた多くの人達に大きな刺激を与えるという点でも劃期的なできごとであるが、「カクテル・パーティ」という作品自体も、一九六〇年代の沖縄の文学活動のありかたを象徴的に現わしているという点で、注目に価する。この作品の前章で作者は、沖縄の知識人「私」を主人公に設定し、沖縄を支配する米人のひとり「ミラー」と日本人「小川」、中国人「孫」の四人を登場させ、支配者の立場と被支配者の立場にたつ各々の人間の微妙な対立を描くなかで、米国、中国、日本の三つの国のかかわりのなかで生きてきた沖縄の人間の意識のありようを掘り下げようと試みたのである。そこでは、たとえば主人公の「私」は、支配者の立場にある「ミラー」とのかかわりでは被支配者の立場を強く意識しながら、同時にかつての日中戦争においては日本人として加害者の立場にたたざるをえなかった事実にもとずく「孫」への屈折した意識をもつものとして描かれるのであり、更に、かつて被害者の立場にあった「孫」の沖縄人に対する批判的な視点を描くことで沖縄人の国際的な位相におけるありかたや、あるいは「小川」と「私」との間の多くの面で共通しながら底の方に微妙なわだかまりのある意識などを描くことによって、沖縄の人間の屈折した意識を構造化しようと試みているのである。

そこには、かつてみられたような米国と沖縄のかかわりを、植民地的な支配と被支配という単純に対立する政治的な状況としてのみとらえるのではなく、歴史的な過程において規定された沖縄の人間の意識のありようを通して内面化してとらえているのであり、その点でも、一九六〇年代の文学活動の一つの方向を象徴的に示すものとなったのである。

文学的立場や方法の多様化を顕著に示し始めた一九六〇年代の文学活動は、先にもふれたように個人的

な意識のありようを掘り下げるようになったが、時のたつにつれて新しい動きを更に加味するようになっており、それがこの作品にあらわれているのである。

一九六五（昭和四〇）年頃から激化し始めたベトナム戦争が、米国の前線基地としての沖縄をクローズアップすることになり、戦争体験をふまえた反戦の意識と、ベトナム戦争に対する加害者の立場に沖縄が立たされているという自覚を、強めるようになった。また、これまでひたすら「祖国復帰」を願っていた沖縄の人々は、沖縄の施政権の返還が具体的な日程にのぼり始めるにつれて、これまでの憧憬的にとらえていた「祖国」の現実のありかたについて冷静にとらえるようになってきた。「憲法の空洞化」が指摘され、復帰のありかた、どのようなかたちで復帰すべきか、が切実に問われるようになったのである。

これらの国際的・国内的な政治状況は、沖縄に、「本土」とのかかわりや、あるいはまた過去の歴史的な体験をふりかえる契機をあたえるものとなり、このことが逆にそれらの歴史を生きてきた沖縄人のありかたを根本から問い直さなければならぬとする立場を生みだすものとなった。

そして、それは沖縄がもともと持っていたもの、あるいは持ち続けてきたさまざまのものを、それとして対象化しようとする姿勢をつくりだし、文学作品の中に、たとえば「方言」を、あるいは沖縄の「フォークロア」を、自由に表現しようという試みとして現われてきたのである。これは、明治から昭和十年代に至る沖縄の文学活動が、もっぱら中央の文壇文学を直接のモデルとして、それと同質の作品をつくりだすためにみずからの保持するものを積極的にみずからの手で葬ろうとした態度とは、全く異質のものであった。そしてそこで始めて過去の文学活動のもっていたある種のこわばりを捨てて、自由にこだわりなく

みずからを表現するところにようやく到達したのである。

文学における表現は、もともとそのような自由や、こだわりなく自己を表現するところに成立するものであるといえるかも知れない。が、沖縄の場合は、近代のその過程の特殊なありかたによって、そのような表現が困難であったので、戦後の二十数年もの体験を経てようやく本来あるべき地点に到達したといえるのである。第六十六回（昭和四十六年度下半期）の芥川賞の受賞作となった東峯夫の「オキナワの少年」は、このような過程を経てようやく自由な、こだわりなく表現できる位相に沖縄の文学活動が到達しえたことを示す作品となっている。

「オキナワの少年」において「方言」を大胆にまた自在に駆使して新しい文体をつくりだした東峯夫の創作活動は、きわめて高く評価されるものであり、そこからまた別の文体の面における新しい可能性を考えることもできるが、東峯夫の新しい文体創出の努力をそれとして認めながらも、そこに至るまでの多くの先人たちの苦悶を考えるとき、やはりそこに文学活動の歴史というものを考えざるをえないのである。

結びにかえて

本稿では、沖縄の戦後の文学活動を、おおよそ三期にわけて概観してみた。それを簡単にくり返すと、戦後の空白期の趣味的なものから、米軍の苛酷な支配のもとで政治的に状況とかかわったり組織的な文学活動を行う第二期を経て、個人の内面的な意識のありようや歴史的な過程の独自のありようによってつく

りだされた沖縄の人間の意識を掘り下げるなど多様な文学的立場や方法のみられる第三期に至るというように位置づけることができよう。そして、その第三期、すなわち、一九六〇年代の後半に入って、沖縄の文学はようやく自由にこだわりなく自己と、そしてその生きる場である沖縄を表現することが可能になったといえるのである。

とは言え、むろんこの各々の時期には、また各々の大きな問題がひそんでいることは確かである。たとえば、第一期の人達が自からの戦争体験を何故深く対象化しえなかったか、という問題、第二期の政治的な状況を文学と直接にかかわらせたその意識のありかた・原因、第三期で言えば、「方言」を生かした新しい文体の試みのもつ文学的な意味や、今後の可能性の問題、等々、そこにはさまざまな問題があり、これらの問題は更に深く追求されなければならないと考える。が、ここではその他に考えられるさまざまな問題とともにとりあえずの問題提起に留めたいと考える。

更に、本稿は、文学活動の具体的な記述において、精疎があり、第一期については詳細に、第三期については疎略になっているということを断わっておきたい。それは、時間的な経過によって第一期が客観的に対象化しうるのに対し、第三期は現在の文学活動とそのままかかわりをもっていて、いまだに充分に整理しえない事情があり、したがって評価が流動的であるということによるのである。

一九七二年の施政権返還を経て、「沖縄の戦後は終った」という声もある。が、その戦後が沖縄にとって何を意味するかは未だ明らかではない。戦後のありようを示す資料も充分に整理されているともいい難い。その点でも本稿も一つの試論に留まることもまた確かである。